



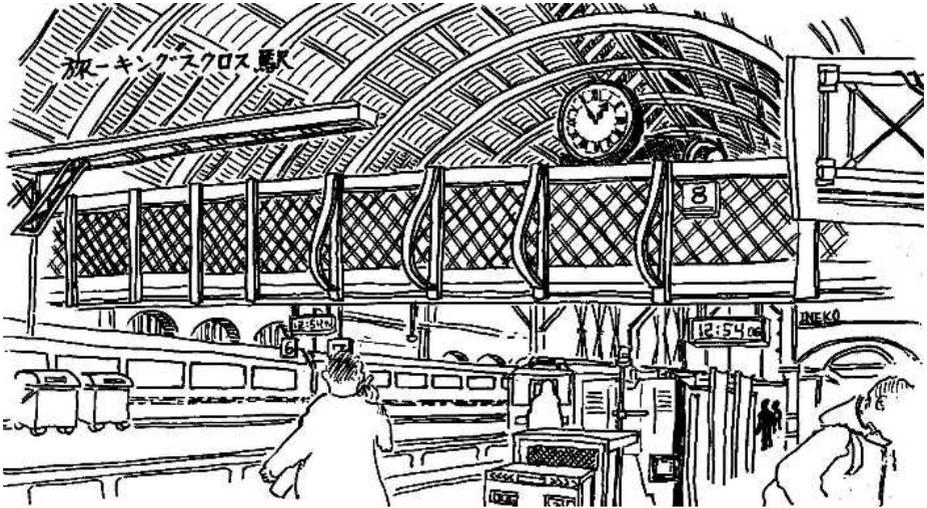
2008年10月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2008年10月
第 70 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（9）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（66）（山内 薫）	6
『常用字解』の編集について	8
「大滝先生のBlog 2008年9月3日」より	12
見果てぬ夢を（13）（山本優子）	13
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	15
東京漢点字 学習会報告（菅野良之）	21
追悼 木下田鶴子様（岡田健嗣）	22
漢文のページ	23
漢点字講習用テキスト（初級編・第11回）	28
ご報告とご案内	29

漢点字の散歩 (九)

岡田 健嗣

四 言葉に出会う (承前)



今回も〈点字〉の構成を考えます。〈点字〉をこ
存しない皆様も、点字をパターンとしてお受け止
めいただければ充分です。点字で何が書かれてい
るかを読み取る必要はありません。

⑥点字の構成 (再び)

1

一八二五年、ルイ・ブライユによって初めて案出さ
れた〈点字〉は、当初、中々世に受け入れられなかつ
た。ブライユは、その普及を知ることなく、一八五二
年に、肺結核で亡くなった。四十三歳だったと言う。

当時の欧州は帝国主義真つ盛りで、各国が産業革命
を争っていた。その歪みの一つと言われているのが、
農村の疲弊と都市の巨大化であった。都市の巨大化と
言うのも、農村から流出して都市に流れ込んだ元農民
による人口の増大のことで、人口は急速に稠密となっ
て行った。そして公衆衛生の不徹底と相俟って、肺結

核という度し難い病の瀰漫をもたらしたのである。

勿論肺結核は、その時代に初めて知られた病ではな
い。ずっと以前から死の病として恐れられていた。し
かしブライユの生きた十九世紀から、二十世紀にかけ
ての流行は、未聞のものがあつた。我が国でも第二次
大戦後にアメリカから導入された抗生物質を待つま
で、癒やし難い病として恐れられていた。ブライユも
そのような病で、命を落とすこととなつた。産業革命
の陰の部分には、民衆に大きな犠牲を強いたと言える。

さらに産業革命は、貨幣経済の促進と欧米帝国主義
国家の巨大化をもたらして、二つの大戦とその後の冷
戦として実現したことは言うまでもない。

しかしそのような陰の面ばかりをもちたらしはしなか
つた。勿論物資を豊かにし、交通を発達させ、限りな
い技術の発達と、経済の拡大があつて、もう一つの変
化、人の意識の上に変化が現れた。農村から都市に集
まった人々は、中世以来の都市文化を吸収しつつ、経
済の拡大をエネルギーに、新たな文化を築き始めたの
である。その発現の一つが、人権の芽生えと、識字へ
の欲求であつた。

視覚障害者であるブライユとその周辺の人々は、そ
のような空気の中で、自らを鼓舞したのである。そう
して〈点字〉は誕生した。



ルイ・ブライユの点字表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
1 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩	Upper4
	Aa	Bb	Cc	Dd	Ee	Ff	Gg	Hh	Ii	Jj	
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
2 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩	+ ⠠
	Kk	Ll	Mm	Nn	Oo	Pp	Qq	Rr	Ss	Tt	
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
3 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩	+ ⠠
	Uu	Vv	Xx	Yy	Zz						
	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	
4 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩	+ ⠠
									Ww		
	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	
5 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩	Lower4
	51	52	53	54	55	56					
6 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥					
	57	58	59	60	61	62	63				
7 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦				

ルイ・ブライユの点字音階

	Cハ	Dニ	Eホ	Fヘ	Gト	Aイ	Bロ	
八分音符 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧ (1列目)
	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	
全音符 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦ (3列目)	
二分音符 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦ (2列目)	
四分音符 :	⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦ (4列目)	

ここに示した表は、お馴染みのブライユの点字の一覧である。その下に示したのは、点字楽譜の音階を表す音譜である。

ルイ・ブライユがどんな人物かは、よく分かっていない。一般には、幼児期に失明し、天才の名をほしいままにした人物の姿だけが喧伝される。

ブライユについて語られるとき、もう一つ出て来る姿がある。オルガン奏者としてのブライユである。そこで言われることは、ブライユが先ず求めたのは、触読文字の〈点字〉ではなく、触読できる楽譜だったというのである。確かにそうかもしれない。目的意識として、オルガンを弾くのに必要なのは楽譜である。触読できる形で手に入れたいと欲しても、彼の置かれる環境からすれば、けだし自然である。

しかしこの〈点字〉の符号の一覧を見ると、楽譜の点字、音階を表す点字を念頭にだけ組み立てられたとも思われない。先ずはアルファベットを定めるための点字符号の一覧を作成（ブライユが作ったのは、五列・五〇番目までであった）して、アルファベットをその前半二五番目までに順に当てて行くという作業を行ったと見える。（当時のフランスでは、まだWは定まっていなかったと言う。）

ここで既にご紹介していることだが、〈点字〉の構

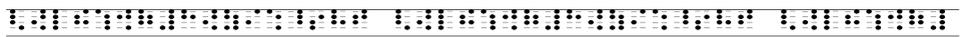
成を復習して見たい。

ブライユが作った一覧は、縦三点・横二列の六つの点「⠠」を最小単位としたパターンであった。この形を日本語では「マス」と呼ぶ。

しかしブライユの想定した〈点字〉の最小単位は、この六つの点の構成ではなかった。この一マスの上の四つの点「⠠」のパターンである。つまりこの四つの点「⠠」で全ての文字が表せれば、誠に目出度し目出度しであったのである。ところが当時のフランス語で使用するアルファベットは二五個である。四つの点「⠠」の組み合わせで表せるのは一五通りである。これでは到底数が足りない。

読者諸兄姉に思い出していたいただきたいことがある。

一九世紀前半のフランスの作家・スタンダールの「パルムの僧院」では、主人公が牢獄の窓から見えるある屋敷の窓の内に、美しい娘のピアノを弾いている姿を発見する。一瞬にして虜になる。じつと見詰めているうちに、先方が目を上げる、目が合う。話はこのように進むが、主人公は何と大胆な行動に出る。暗号通信を試みるのである。どんな暗号かと言えば、ペンを手に持って振る、その回数がアルファベットを表すのである。Cなら三回、Qなら一七回、Vなら二二回振る。随分気の長い暗号ではあるが、どうやら功を奏したようで、先方の女性も同様の方法で、返事を返してくれるようになった。



こういうエピソードを見ると、当時一般に、アルファベットの文字が、Aを先頭として何番目にあるかを、多くの人が知っていたばかりでなく、そこに意義を見出だしていた可能性は強い。少なくともアルファベットを、序数詞として使用していたはずである。それを逆に応用したのがこのエピソードの暗号である。ブライユの「点字」も、四つの点「 $\cdot\cdot\cdot\cdot$ 」でできる組み合わせのうちの一〇個の点字符号を基本形として順序づけて、その下に「 $\cdot\cdot\cdot$ 」の二つの点を加えた六つの点「 $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ 」を単位として表すことにした。それを五列に整理し順序付けて、五〇個の点字符号を定めたのである。その点字符号の一番目をAとし、二番目をBとし、……、最後の二五番目をZと決めたのである。数字も同様で、一列目の一〇個の符号を使って、左から1・2・3……、一〇番目の符号、アルファベットではJに当たる「 $\cdot\cdot\cdot$ 」で、0を表すこととした。

このようにブライユは、点字符号を整理し順序付けることと、アルファベットの序列を対応させる作業を通して、後の「点字」の可能性をも確保したと言えるのであろう。

3

さて、音階を表す「点字」はどうだろうか？
その前に、墨字の楽譜の表記法を復習しておきた

い。音符の表記のみを考える。

墨字の音階の表記…墨字の楽譜は「五線譜」と呼ばれて、五つの横線の上に長円形を印して、音の高さを表す。音の長さは、その長円形の形で表される。また五線の左端には「ト音記号、ヘ音記号」と呼ばれる記号が付されて、表される音の高さが定められる。一目で高さや長さが分かるようになっていた。

点字の音階の表記…点字では線を引いて音の高さを表すことができない。そこで高さや長さを一つの点字符号で表すことにした。

音楽で言う「音階」には、二つの表し方がある。その一は、お馴染みの「ド・レ・ミ・ファ」である。

点字の音階符号の基本形は、一覧の一列目の四番目から一〇番目までの七つの符号を使用している。その音符は八分音符である。

表のように、この点字符号が表す音階は、ハ長調の「ド・レ・ミ・ファ：シ」である。ピアノの鍵盤の中央から、白い鍵盤だけを使って奏することのできる「ド・レ・ミ」である。

もう一つの音階が「A・B・C：G」である。（ドイツ語圏では、Bの代わりにHが当てられる。）これはハ長調の「ラ」から始まって「ソ」に至る音階で、やはりピアノの白い鍵盤で弾ける音に付けられた名称である。我が国では「イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・ト」

が当てられる。

この「A・B・C」と「ド・レ・ミ」との関係が重要である。調子を決めるのが「A・B・C」で、決まった調子（長調のとき）の主音から始まる音階が「ド・レ・ミ」である。つまり「A・B・C」と呼ばれる音階は、音の高さの位置が定まっただけで、どんな場合でも「A」と言えばハ調の「ラ」に、「E」と言えば、ハ調の「ミ」の音を指すのである。「ド・レ・ミ」は、この「A・B・C」で定められた調子の主音を基本とした音階の名称なのである。そこで我が国では、調子を「ハ長調」とか「ヘ長調」とか呼んでいるのである。つまりハ長調の「ド」は「C」の音を、ヘ長調の「ド」は「F」の音を指す。

点字符号の側からこの関係を見ると、実にややこしくなる。点字一覧の表から見れば、明らかに一列目の四番目から一〇番目の符号を使って表されてはいる。点字符号の順序からすれば、ここに示したものが自然である。しかしこの符号の配列が示しているのは、ハ長調の「ド・レ・ミ・ファ」でしかない。しかもこの点字符号は、「C・D・E・F・G・A・B」をも表しているのである。つまりハ長調のドの点字符号は「 ⠠ 」、ヘ長調のドの点字符号は「 ⠠ 」となる。点字一覧の表の順序をハ長調の「ド・レ・ミ」に当てるということは、点字の楽譜の基本構造が、ハ長調の音階

を表すところにあることを意味しているのかもしれないし、文字を表す点字との間に、少しならず齟齬を来すことにもなった。

確認のために音階を表す点字符号と、文字を表す点字符号を比較して見る。音階のCは「 ⠠ 」、文字のCは「 ⠠ 」、音階のFは「 ⠠ 」、文字のFは「 ⠠ 」、音階のAは「 ⠠ 」、文字のAは「 ⠠ 」である。このようになずれが生じている。

このずれがどこから来たのか？私の想像であるが、生物の系統樹を思い描けば、理解し易いのではないだろうか？

ブライユが〈点字〉を案出する際、脳裏にあったのは文字と楽譜、両方の表記法の確立であった。

先ず色々なケースを想定して、点字のパターンの最小単位を定めることにした。その結果として出来上がったのが、点字符号の一覧である。

これが系統樹の一番根本に位置する。そこから楽譜の幹と文字の幹が別れる。楽譜の幹は極めて短い。現在私達が使っている点字の楽譜は、世界に共通しているのである。

もう一方の幹である文字は、長く伸び、広く枝葉を別っている。世界の言語に対応したものに变化したのである（漢点字）もその一つである。

（続く）

点字から識字までの距離(六六)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

漢字批判(下)

「社会言語学」という言語と社会の相関関係を研究する言語学の一分野がある。その「社会言語学」と題された雑誌が二〇〇一年から毎年一回刊行されており、第一号創刊の辞には「本誌は、ある人が意識する／意識しないを問わず、言語に対してとる態度がどのような意味を持つものであるかという問題を徹底的に追究しようというものである。」と書かれている。

現在までに刊行された合計六号の目次を拾ってみると「漢字という障害」(あべ・やすし)、「現代日本における差別化装置としてのかきことば」漢字表記を中心に「(ましこ・ひでのり)、「漢字という権威」(あべ・やすし)、「漢字をめぐる六つの迷信」(C・マーシャル・アングラー)、「漢字イデオロギーの構造」リテラシーの観点から(角知行・すみ・ともゆき)などの漢字に対する批判的な論文が目にとまる。その多くは障害学の視点に立った論考で、点字使用者や弱視者をはじめ、読み書きに障害のある学習障害者、日本手話を第一言語とするろう者、知的障害者、低識字者等々、漢字を読むことに困難を抱えている漢字弱者といえる人たちにとって漢字がいかに社会的な障壁になっているか、漢字弱者の「漢字問題」の本質は、漢字弱者をと

りまく社会環境にこそあるという視点で漢字の問題を捉え直そうとしている。今回はあべ・やすし氏の「漢字という権威」(『社会言語学』第四号「社会言語学」刊行会二〇〇四 所収)を参考に漢字の問題を考えてみたい。

さて、現在までに漢字についてのよく言われてきたのは次のようなことばである。「漢字は表意文字である。」「日本語は漢字仮名交じり文でかかれるものである。」「漢字なしでは同音異義語を区別できない。」「こうした漢字を巡るいわば神話とも言うべき思いこみをあべ氏は一つ一つ解体してゆく。

まず「漢字は表意文字である」といわれるがもともと漢字の八割以上が形声(音を表す字と意味を表す字を合わせて一つの漢字を作る方法)文字であり、ものの形をかたどって文字を作った象形文字はごくわずかで、その象形文字でさえ一定の読み方が決まっている。漢字にはそれぞれ音があり、音を伴わない字は意味のある語となりえない。従って漢字は概念と結び付いており漢字を見るとまず意味が分かり、それから発音が分かるといふ漢字論は成立しない。漢字の意味を理解するときにも、書くときにも脳の意識下の処理過程においては音声言語が決定的な役割を果たしていることが実験研究によって証明されている。私たちがワープロの入力で同音異義語の置き換えを間違えたり、校正で誤りを見落とす原因も漢字の認知処理が音声言

語主導で行われるからだという。あべ氏は音が同じだが全く誤った漢字を六カ所挿入した二行の文章を読ませて、間違った漢字が使われていても音声化してみると、もともとの意味が理解できることを証明している。(その文章は「わたし自信は性格にはわからないのだが、わたしの正確はのんびりしているようだ。大將的に彼はせっかちで、いくら中位しても効かない蛍光がある」というものだ。)

次に「日本語は漢字仮名交じり文でかかれるものである。」という誤解は少し考えてみれば当たり前のことだが、言語と文字を等しいと見るあやまりである。私たちの母語である日常使われている日本語は音声言語であり、漢字仮名交じり文は日本語を表記する一つの方法にすぎない。そうでなければ点字で表記された文章やローマ字や仮名だけで書かれた文章は日本語ではないということになってしまう。

この連載でも以前同音異義語を取り上げたが「漢字なしでは同音異義語を区別できない。」と多くの人が思いこんでいるし、事実漢字を説明しなければどちらか判別の付かない例は枚挙にいとまがない。同音異義語については日本語の音韻構造が他の言語に比べて単純であるために多くなるという見解があるが、むしろ現実には漢字の音読みに使われる音が非常に限られ、偏っているという事実があり、日本語のおとを有効に利用していないということこそ漢字語に同音異義語がたくさんある原因なのである。「漢字は書きことばに

おける同音衝突をさけている救世主ではなくて、音読み種類数の不足という意味でむしろ同音語の元凶であり、話し言葉に混乱をもちこんだ。」「『増補新版イデオロギーとしての『日本』』ましこ・ひでのり 三元社 二〇〇三)

あべ氏は、はじめから話し言葉として使うつもりのない造語ばかりを生み出し、会話では使えない漢字語をありがたがり、文章の中で乱用してしまうのは漢字に対する権威主義によるものであると糾弾している。こうした漢字をありがたがる態度を漢字依存症と呼び、この病から日本人が解放されたなら「ことばのいかえ」の大切さが自然と認識されるようになるだろうと述べている。

そうした意味であべ氏は点字について、点字も墨字と同じように文字として対等の位置に置かれるべきであり、むしろ漢字文化をよそに百年以上にわたって日本語を表記してきた先をいく文字と評価している。そして、これからは、漢字にたよらずに、点字になおしても、つまり、表音文字になおしても、無理なくよめる文章、耳で聞いてわかる文章をかくべきであると結論している。(あべ・やすし氏の視覚障害者と点字などについて詳しく述べた論文「漢字という障害」は『ことば／権力／差別／言語権からみた情報弱者の解放』ましこ・ひでのり編 三元社 二〇〇六 に収録されている。)

『常用字解』の編集について(承前)

漢点字訳『常用字解』の完成を前に、同書のご紹介の意味で、前号・本号と、白川静先生の筆になる「常用字解の編集について」と「凡例」を掲載させていただきます。

四 常用漢字表以外の文字

文字の解説にあたって、その文字構造の各部分について説明するときに、当然のことではあるが、常用漢字以外の漢字がその要素となつていることが多いので、そこから解説することが必要となる。たとえば基の場合、音符は其(き)の字であるが、其は常用漢字にはない。其は箕(み)の象形の字で、わが国でいう塵取(ちりと)りの形である。少し横幅の広い四角形のものであるから、其には四角形のものという意味があり、棋(き) (しようぎ) ・碁(き) (ご) ・旗(き) (はた) ・箕(き) (み) ・ちりとり) ・欺(ぎ) (あざむく) 角ばった面をつけておどす) は、みなキという音と四角形のものという意味を承(う)ける字である。従つてそのことの解説抜きでは、それらの字の意味を理解することはできないのである。また志は之(し) (志の上部の土は、もと之の形で、行

くの意味)を音符とする字であるが、之は常用漢字ではない。しかし志・寺・往の字は、みな之を字の要素として含むものであるから、之を解説することがなくては、それらの字を説くことができない。

文字の構造によつて字源を明らかにしようとするれば、その文字構成の要素となる主要な単位の字形について説明する必要がある、常用漢字以外の文字をも含めて、その複合の関係を明らかにしなければならぬ。それでこの書では、常用漢字以外の多くの文字を、解説の文の中で取り扱うことになつた。常用漢字以外の構成の単位となる字の理解は、むしろ文字学の基本にかかわるものであり、文字の形体学的な理解の主要な方法であるからである。

五 文化史的な理解の方法

漢字の理解には、漢字の形だけでなく、その形が意味する内容についての理解が必要である。たとえば史は「説文」三下に「又(手)の、中を持つるに従ふ」とし、「中正を持つる」という史官の立場を示すものとするが、史・使・事が一系列の字であることから知られるように、それは祭り、祭事に関する字である。祭事の記録がのちの史の起源となるのであつて、史の字が作られたときに、歴史記述の理念としての中正(どちらにもかたよらないで正しいこと)というような観念

が、すでにあつたのではない。文はもと死者の胸に文身(二時的に描いた入れ墨)を加えた形である。死者の霊が死体から脱出するのを防ぎ、死者の復活を願って美しい朱色でバツ形などの文身を加えた。産(産※)は子どもが生まれたとき、その額(厂)の上に、彦(彦※)。「※」はそれぞれなべぶたの下が「メ」になっている。は成年に達したとき、その額(厂)の上に文身を描くことを示す。みな加入儀礼の意味をもつ字である。婦人が亡くなったとき、両方の乳房に文身を加え、*1(せき・以降、「*」つきの番号は左下枠内の文字を参照)。(あきらか)・爽(あきらか)といった。これも加入儀礼の意味をもつ字である。

漢字はもともとその時代の社会的儀礼・加入儀礼の実際に即して生まれたものであり、そのような生活の場から離れて、観念的に構成されたものではない。およそ三千三百年前に漢字が成立した当時の宗教的な観念に基づいて、儀礼のあり方がそのまま文字の構成の上に反映されている。それだとえば死葬の際の儀礼は、そのままその関係の文字の構造の上に反映されている。そのとき、死者の衣に対し

*4 罫 <small>かん</small>	*1 爽 <small>せき</small>
*5 罫 <small>かん</small>	*2 裛 <small>かい</small>
*6 𦵑 <small>てん</small>	*3 𦵑 <small>なみだ</small>

ていろいろの儀礼が行われたことが、文字の構造によって知られるのである。

哀(死者の衣の襟もとの中に、神への祈りの文である祝詞(のりごと)を入れる器の【さい】を入れて、死者の魂をよびかえす儀礼)

哀(死者の衣の襟もとの霊の力を持つ玉をおき、その枕もとに足あとの形で行くの意味をもつ之を加えて、死者が死後の世界に旅立つのを送る儀礼)

*2(かい)(死者の衣の襟もとの*3(なみだ)を注いで、死者を懐かしみ懐う死別の儀礼)

*4(かん)(金文の字形は*5(かん)。死者の衣の襟もとの死者の霊に力をそえる玉をおき、その上に生命の象徴としての目をかいて、死者が生き還ること(かえ)を願う儀礼)

哀(死者の衣の襟もとの麻の喪章をつけて、死者の穢れを祓う儀礼)

展(死者の衣の襟もとの呪具の*6(てん)をつめて、死体に邪霊がとりつくのをぐ儀礼)

右にあげた諸字によって、当時の死葬の礼がどのような形式で行われていたかを知ることができる。また、死葬の儀礼の実際を復原することもできるのである。

このことはこの関係の文字だけでなく、古代の文字として残されている字形の全般について、いうことがで

きる。それは字形の解釈に必要なだけでなく、古代の人々の生活や思考のしかたの全般に及ぼすことができる。文字を通じて、その生活史や精神的な理解にまで及ぶことができるのである。またそのことについての理解がなくては、文字を体系として理解することは困難であろう。文字をこのように文化史的な事実として理解することは、文字学の極めて重要な一面であるので、この書では、そのことについても多少の論及を試みておいた。

この書は漢字の形とその意味との関係の解説を主とするものであるから、その用例としての語彙(ごい)を列挙することをやめて、代表的な用法についての用例にとどめた。漢字について、最も基本的な字形の構造についての学習を目的とするからである。

この書の作成に当たっては、解説の文は白川静が担当執筆し、その他は解説文の修訂をも含めて、すべて津崎幸博が担当した。校正は津崎史も担当した。

平成十五年十二月

白川 静

凡 例

見出しに収録した文字

常用漢字表にある全文字1945字と、解説に必要な1字(目)。見出し文字総数は、1946字と、その旧字形798字の2744文字。

見出し字について

常用漢字表にある文字は、その字形によった。その字形が旧字形と異なるときは、旧字形を()に入れて示した。

「圧」5 (歴) 17

アツ (オウ(ッ)アフ) おさえる しずめる)

旧字形には、書き方の違いによるものも含めた。

字形は一応「康熙字典」によったが、字形学的に改める必要があるときは、改訂を加えたところがある。

配列について

漢字はその字音によって、五十音順に配列した。同じ音の字は総画面数順、同画面数の字は常用漢字表の掲載順によったが、一部異なるものがある。

常用漢字表に訓でのみあげられているものも、字音のあるものは字音によって収めるようにした。

「例」坪は、訓の「つぼ」ではなく、字音の「ヘイ」で立項

検索しにくい音訓には、案内見出しを用意した。

卸(おろ)す・卸(おろし)↓シヤ(卸)(266頁)

字の画数について

画数は運筆上の実際の数に従った。

くさかんむり、しんによるの字は、新字形では三画とするが、旧字形では四画として数える。

画数は見出しの下に、算用数字で示した。

字音・字訓について

字音・字訓は、常用漢字表にあるすべての音訓（太字で表示）と、語彙として実際によく用いられる音訓のみをあげた。

字音はカタカナ、字訓はひらがなで表示し、旧字音は（ ）内に示した。

文字資料について

古い文字の資料として、甲骨文字（卜文、金文、および「説文解字」に収める籀文と古文、篆文のおもな字形を示し、以上の順に掲げた。

「疾」 10

シツ やまい （はやいにくむ）

解説について

字形は六書の法にもとづき、象形・指事・会意・形声・仮借によって解説した。

【さい】は、単独の文字として字書に掲げられない字であるが、甲骨文の【さい※】（さい）と関連のある形であるので、口と区別するために【さい】（さい）と音を付けることにした。

解説―会意。口と、可―口、（か）とを組み合わせた形。口は【さい】で、神への祈りの文である祝詞（のりと）を入れる器の形。その【さい】を木の枝（、可―口、）で殴ち、祈り願うことが実現するように神にせまる。

（可の項）

ふりがなについて

引用書名、王朝名、その他常用漢字表の音訓にあげられていないもの、読みづらいもの、読みを特定したものなどには、適宜ふりがなを付けた。

引用文と出典について

古典の引用にはすべて、旧字形・旧字音・歴史的かなづかいを用い、出典は原則として書名・篇名をあげた。

用例について

見出し字を使用する代表的な語彙と、その意味・内容をあげた。

用例―「木石」木と石 「木製・木造」木を材料として作ること 「木皮」木の皮 「木片」木の切れ端

「巨木・大木」大きな木 「古木・老木」年を経た立ち木 「枯木」枯れた木 「木陰」木のかげ。木の

下 「木立」むらがり立っている木 （木の項）

「大滝正雄先生のBlog」

二〇〇八年九月三日」より

左は、横浜市議会議員の大滝正雄先生がご自身のBlogに、本会の活動をご紹介下さったものです。大滝先生はかねてより、視覚障害者の国語教育に一方ならぬご関心をお寄せ下さり、本会の活動をご支持下さっております。また昨今の殺伐とした社会状況に鑑みて、今こそ古典に親しんで、人間を考えること、そのようなことそのものが心の余裕となるのではとおっしゃっております。ご精読下さい。

横浜漢点字羽化の会による漢点字訳辞書『常用字解』がまもなく完成します

横浜漢点字羽化の会は、1997年に『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）を漢点字版として完成。全90巻の大部になる同書は現在、横浜市中央図書館が所蔵・公開しています。この刊行には横浜国立大学の村田忠禧教授がご尽力。学習研究社のデータをもとにボランティアらが点字を打ち、手づくりで製本も行なうという労作でした。今回、同会が新たに挑んだ『常

用字解』（白川静編、平凡社）は、視覚障害者にも漢字の「字形」の理解が出来るよう便宜が図られているもので、『漢字源』と合わせると視覚障害者にとつて、漢字理解がより進むと共に、日本文化や中国古典への鑑賞の幅をいっそう広げられるようになると、完成が今から待望されています。

この訳本も、横浜市中央図書館に寄贈する予定で、今年秋に前半を、09年度に後半が納入される見通しです。「く羽化の会」の岡田健嗣代表は、「今回の試みで（視覚障害者は）二つ目の座標軸を手にするようになります。幾つかの違った視点を持ち得るということは、それだけで視野の広がりや認識の深まりをもたらします」と、製作に携わっている皆さんへの感謝と完成間近の喜びを綴った書簡を、私に送ってくださいました。

「学校教育（視覚障害者）の中にも漢点字の導入を」と、岡田さんたちは粘り強く運動を進め、私も微力ながら漢点字の普及活動を支援させていただきました。「時間がかかるな」というのが、私の正直な実感なのですが、今年の夏、朝日新聞で興味深い文章を読みました。

8月20日付け、『夏に語る』という記事の中で、作

家の藤本義一さんがこう語っています。「たとえ
ば、点字という手段はどうか。点字作文コンクルの
審査委員長をしているが、目の不自由な方たちが深い
視点を持って文章を書いていることに気づかされる。
点字が一般にもっと普及して、健常者の表現活動にも
遣われるようになってきたらいいな。目の不自由な人
たちにも何かを伝えたいという思いが広がり、うるお
いを取り戻していけると違うかな」。藤本さんは、
戦後の日本の歩みを「干からびていったということ」
と表現し、「人間の精神の干潟とひび割れ」を鋭く指
摘しています。「アナログな表現にこそ、新しい可能
性が隠れている」との作家の心眼に、私は点字の意味
を改めて思い返したのです。

見果てぬ夢を（十三）

山本優子

十三 あげぼの（承前）



十月、ついに週二回発行の点字新聞「あげぼの」刊
行への段取りができた。日本初の点字新聞である。今
日まで続いている「点字毎日」が創刊されたのが一九

二二年（大正十一年）であるから、これに十七年先立
つ画期的な創刊だった。「あげぼの」第一号は三百部
印刷することにした。購読料は一部郵送料込みで四銭
と定めた。

当時は盲人用点字郵便料金制度など、無かった。一
九一七年（大正六年）に郵便規定改正がなされて、や
つと点字郵便物が他の郵便物より安い料金で取り扱わ
れることとなったわけだが、無料で郵送できるようにな
ったのは、ずっと後の一九六一年（昭和三十六年）
からである。「あげぼの」発行当時の一般封書の郵便
料金は三銭、葉書は一銭五厘だった。貧しい盲人にと
って、購読料に加えて郵便料金を払うことがどれほど
大変か、孝之進にはわかっていた。それで購読料は郵
送料込みということにしたのである。加えて、点字の
普及と経済的に困難な盲人への励ましを熱望した孝之
進は、まずは無料で全国に発送する決断をした。経済
的な余裕のない孝之進たちにとって、誰が見ても無謀
な出発だった。が、孝之進には今取り組んで失敗する
ことへの恐れよりも、取り組まないで終わってしまう
ことへの懸念があった。御心に適うなら必要は必ず満
たされるという信仰を奮い立たせ、反対する関係者を
説得し、「あげぼの」創刊号の無料発送へと踏み切っ
たのだった。

六光社の「社員」一同、眠る時間を削って「あけぼの」三百部を刷り上げ、心をこめて折っていった。勢いによって、郵送準備にも取りかかる。全国の訓盲院、盲人たちの住所を書いた封筒に折りあがった「あけぼの」を入れ、封をする。作業に打ち込む孝之進、増江、手伝いの者たちの心は、弾んでいた。誰からもなく讚美歌が口をついて出てくる。いくつもいくつも讚美歌を歌いながら仕事を終えた。

りんご箱に「あけぼの」をぎっしり詰めこむ。それを大八車に載せた。孝之進と増江は遠足に出かける子どものようにはしゃぎながら、井口や井上と共に最寄りの「橘（たちばな）郵便局」まで重たい大八車を押し去っていった。

郵便局で、局員にたずねられた。

「なんや分厚い封筒、ようさん運んできはりましたなあ。中身は、なんですか？」

孝之進は、得意そうに「あけぼの」を一部局員たちの前に広げてみせた。

「これ、初めてご覧になる方もあるでしょ。何だと思えますか？」

誰かが声をあげた。

「あつ、ひよつとして、これが目、見えん人の字で

すか？」

「当たり前！」

「ひえー、どないして、こんなん、読めるんやろ？」

「何、書いてあるんですか？」

「見えへん人って、すごいこと、できはるんやねえ」

局員たちばかりでなく、郵便局に用事で来ていた人たちも、ざらざらと点々が浮き出ている紙を四方から眺め、触ってみて、驚きや励ましの言葉を孝之進たちに浴びせかけた。一般の人たちには点字というものはまだまだ知られていなかったのだ。孝之進は、笑いながら簡単に点字の説明をした。点字が日本語の読み書きに使われる文字の一種として当たり前のようにあちこちで見られるようになる日がくるのを想像して、孝之進は嬉しかった。「あけぼの」発行のニュースは、いくつかの一般紙でも続々と取り上げられることになった。

訓盲院を訪れた各紙の記者たちは、孝之進夫婦や盲児たちと会い、その生活の様子を見て必ず驚くのだった。ある者は、

「見えない人も一人で歩いたり、自分で箸を持って食べたりできるんですねー」

と、感嘆の声をあげた。孝之進は、そのような言葉を聞かされるのには慣れていたが、新聞記者ですら盲人を余りにも知らないことを痛感した。

各新聞の「あけぼの」発行の報道記事が届けられると、増江は孝之進に読んできかせた。

「……唯見たる所にては一面に砂を撒布（さんぷ）せし如く凹凸あるのみ何事の認へしたためあるや分明せざれど……」

との大手新聞のコメントに孝之進は大声で笑った。見える人間にとって点字というものがいかに奇妙なものに映るうとも、知ってもらうきっかけ作りができたことを喜んだ。

その「あけぼの」は、世間の反響を背景に、孝之進の予想以上の一大新風を盲人界に吹き込んだ。創刊号は訓盲院の紹介や社会記事を交えた内容だったが、さっそく京都盲啞院の盲生百名中の十名が読めたという喜びを孝之進に伝えてきた。点字を読めるようになって盲人が少しずつ増えてきたにも関わらず、聖書くらいしか点字印刷物がなかった時代だったから、手にした盲人たちがむさぼり読んだというのもうなずける。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第33回例会 2008年8月6日（水） 13…30

15…30、港区ヒューマンプラザ第1会議室

個人的な理由で、まるまる7ヶ月の間、メールチェックはしていたものの、例会も学習会も皆様にお任せしていたので、久々の例会出席は何となく気恥ずかしかったが、優しく温かくお迎え頂けてほっとした。

「神さまがくれた漢字たち」の最終校正段階に入っていて、わたしは何もお手伝いもせず、もうじき出来上がるのを楽しみに見ていた。

その他、NHK学園のテキストの入力方法についても話し合っていた。いつものように予定の時間では足りないほど、皆さん熱中していた。

第34回例会 2008年9月10日（水） 13…30

15…30 ヒューマンプラザ第1会議室

9月の例会は、今年の五月に、NHKの「若葉基金」（福祉に関するボランティア活動団体への、活動資金は二団体に、リサイクルパソコンは全部で101台提供）の、パソコン貸与に申請していたものが、幸

いにも応募数の360団体に対し、38団体が当選し、「東京漢点字羽化の会」は、その幸を得た。その贈呈式が偶々例会の日時と重なり、岡田さんは例会には欠くことができないのと、NHK側の指定で、部屋の都合上、一団体二人のうち、障害者も一人は来て欲しいとのことで、中田会長が、NHKへはわたしを連れて行つてくださることになった。

「羽化」では、ノートパソコンを三台頂いたので、会員で、もうパソコンを買い換えなければならない方に使つて頂くことにした。

* 予告

10月の例会(第35回) 2008年10月8日(水)

13…30〜15…30、7階第1会議室

第18回学習会 2008年10月25日(土)

18…30〜20…30

港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

11月の例会(第36回) 2008年11月12日(水)

第1会議室

第17回学習会 2008年11月22日(土)

18…30〜20…30

わたくしごと

車は常磐道を一路颯爽と走り、目指すは竜ヶ崎の川^か

原代町とかへ。

後部座席は、空調も程よく、自分の思いに沈み込んだり、同車の、前の席の二人の話をぼんやり聴くともなく聴いたり、カーステレオから流れる、音量も小さめの、ドライバー好みの曲に、耳を傾けたりしながら、のんびりドライブを楽しんだ。

さて、目的地に着いて、主催者Aさんに簡単に挨拶を終わらす。何しろ、次々に挨拶に来るからである。

Aさんが、「何を手伝ってもらおう?」とスタツフに聞き、「ジャガイモの皮むき」と言われ、「おお、この三人が皮むきやってくれるよ」と早速仲間に入れてもらった。

先ずわたしたち三人がしたことは、手を洗つてジャガイモの皮むき。5、6センチはあろうかと思える大きな鍋から、茹で上がったばかりのあつあつオジャガの皮むき、「あつちち、あつちち」と言いながらの作業。このジャガイモは、今日のメインの仕事が終えてからご馳走になる、本場仕込みのカレーライスの材料の一部。この皮むき作業は、野外のベンチで、荒削りのテーブルで行うのだから、気持ちのよいこと限りなし。

本格的なカレー作りはその担当者に任せて、わたしたち仲間三人は、今日の指定の場所へと、軽く10分程歩いて行く。出がけにスタツフに「水を飲んで行きな

「さい」と教えられ、さほど飲みたいとは思わなかったが、大切なことだろうと、コップ一杯飲んで行った。

現場に着くともう沢山集まっていた。
主催者Aさんの声。

「皆さん二列に並んで大きく手を広げて、隣の人とぶつからないくらいの間隔を取って並んで下さい。今日が初めての人、手を挙げて！」
もちろんわたしは手を挙げた。

「20人くらいかな？じゃあ、2回目の人、手を挙げて！うん30人くらいか。じゃ、3回目の人、うん15、6人か。では7回の人、3人。では説明します。今日の稲刈りは、今みんながやれる程度だけにします。作業は1時間、まずここに、何本ずつか、片手で握れるくらいのかたまりが幾つあるか、各グループで数えてください」

区分けされた何組かの総号数を出した。

「次に、このかたまりから、一本抜いてください」
わたしは土の上にしやがみこんだ。1メートルくらい伸びた稲穂のかたまりが、風にそよぎながらも、穂を垂れている。(実るほど頭を垂れる稲穂かな)は本当だ。およそ30センチ置きに並んでいるかたまりを確認し、一番手元にあるかたまりから、そつと一本抜いて見た。思いの外簡単に抜けた。根元に土を少し着けている。でもその土はさらりと落ちる。土がよく耕さ

れているからだろう。

Aさんの声、

「さあみんな、その一本に何粒米が着いているか数えてください」

やって見たが、結構難しい。最初は何度も途中で分からなくなつて数えなおしていたが、無駄と知り、大まかに数えた。わたしはでたらめに80粒かな？なんて決めて報告した。

Aさん、

「さあ、その一つのかたまりには何本あるかな？」
これならわたしにも数えられる。伸び揃っている穂を数え始めた。23本か？

Aさん、

「はい、端から数を言つて」

「20本、23本、18本」とそれぞれ報告する。

またAさん、

「では、みんな、自分で数えた一本の米の数を、このかたまりの本数で掛けてください。これが一粒の米から出来た米の量です。さつきみんな数えたかたまりが幾つあったかな？それを掛ければ、およそこの辺りの全体量が分かります」

もうわたしは計算はせず、ただその一粒の米から、これだけ育つことに感動していた。それに、大勢なので、わたしから遠くにいる人の声が聞こえなくなつて

もいる。で、結局どのくらいなのかは分からなくなつたが、何れにしても広い田圃に、2列並んだ6、70人がいる様子が掴めてきた。

Aさん、

「はい、それではいよいよ稲を刈ってもらいます。

鎌を取って来てください。鎌を持つほうの手は、手袋をはめないでください。何故かな？」

「滑って危ないから」と一斉に答えが返ってくる。

またAさん、

「片手で株全体を握って、一度に刈り取ってください」

わたしも鎌をもらい、やって見る。まず、鎌を触つて見ると、刃が鋸状になっている。手前から向こう側に向けて刈ってみた。さすがに今度は、20本余りあるので堅い。それでもわたしにも刈ることができた。この一束を、数本の藁で、くるくると巻いて、縛らずに、巻いた藁の間に、もう片方を挿し込む。こうすると、片方を引つ張るだけで、するりと稲束が解けて、脱穀の時にやりいいのだという。そういえば、この藁も稲からお米を取った残りを乾かしたものである。これもこうして立派に生かされている。

わたしはしやがんだままで、刈り取って束ねるだけで、「はい、お願いします」と声を掛けると、仲間だけでなく、初めて会った方でも、どなたかが、「はい、いただきます」と言っ受けて取って、稲束の所定

の置き場に運んでくださる。つまり、この立ち仕事をわたしは省略しているのである。ところが皆さんは、自分で刈り取り、束ね、決められた手順で稲の山を作つてゆく。稲束は90度に回転させながら、平らに一メートル四方、百二、三十センチの高さまで積んでゆく。従つて、立ったり座ったり運んだり汗だくだ。

皆さんとの比較はともあれ、思いの外わたしなりに刈り取り、束ねることができ、大満足だ。

畝に添って歩けば、一人でも仲間の声を追つて、危険なく歩いて行ける。とてもいい気持ち。

1時間は瞬く間に過ぎた。幾山出来たのだろうか？

Aさんの声でした。

「今度は落ち穂を拾ってください。ほんとうはこの落ち穂は貧しい人、外国から来た人のために、イスラエルやヨーロッパでは残して置く習慣になつています。」

事実ここでもAさんは、落ち穂だけとはいわず、インドネシアやその他の外国から来ている人に沢山援助しておられる。

わたしも落ち穂を探した。五、六本拾つて大事に持った。落ち穂を拾いながら、切り取った稲の切り株が少し濡れていることに気づいた。台地から栄養と水分を稲に与えるために、まだ吸い上げているのだろう。

「さあ、みんな、水を飲んで記念写真だ。この杭からこっこの杭の中に立たないと、写真には入らない

よ。さあ、子供たちは前に座って」

大勢の集合写真の例に漏れず、ここでも誰が入らない、こっちは重なり過ぎていて、と苦勞しながら、時間もかかったが、とにかく予定の作業は終わり、みんなぞろぞろとAさんの家に戻って行った。

「名前を書いてください！書かない人はここには入れません」とスタッフの一人が言う。さらにAさんが「みんなよく手を洗ってから好きな飲み物を取ってください。綺麗に手を洗わない人は食べられませんよ」と言う。わたしたちは笑いながら冷たい水に満足しつつ手を洗い、わたしは紅茶を希望した。

稲束が、そう落ち穂拾いで集められた束だろうか。スタッフがわたしの側を稲束を持って通って行った。やっぱりいい匂い！

Aさんが話しはじめた。

「今年は雨が多く、実り具合がどうか心配しましたが、どうやらここまでできました。後はこの近くの農家の方に刈り取り、脱穀などやってもらいます。まず太陽と土と水に感謝しましょう。これから、インドネシアの本格的なカレーを作って下さったマリカさんに、食べ方を教えてもらいましょう」

マリカさんは中年？の男性、静かな日本語でカレーを手で食べるのだと言う。ちよつと周辺でざわめきが起きた。にんまりしているのはわたしだけだろう。三本の指でご飯とカレーを混ぜながら食べるのだと言

う。Aさんがことさら「きれいに手を洗いなさい」と言った理由がここにあつたのか？愉快だった。「今日はフオークもスプーンもみんな隠しちゃったからね。カレーもサラダもおかわり自由です。一杯食べて下さい」とAさんが補足する。

大皿に一杯盛られたカレーを抱え、冷たい紅茶は椅子一脚を、何人かで机代わりにした椅子に置き、大きな骨付き鶏肉や豚、にんじん、ジャガイモ、何種類ものスパイスにおいしい空気と太陽も加え、大つぴらにこの指で持ち、零す心配もなく、しかも野外で食べるのは開放的でことさら気持ちがいい。直接手を使って食べるのは、体に入れるのに丁度いい温度になるからだとドライバーの女性が説明してくれた。なるほど、と素直に納得する。「木村さん、サラダもあるよ」の声には、「サラダはこのカレーを食べ終えて手を洗って改めて挑戦する」とニコニコ顔。

誰かがクラシックギターを爪弾き始めた。ラジオもラウドスピーカーもない、百人近くいる人声さへ、沢山の木々に囲まれた野外では騒音にはならない。ギターの音色が心地よい。鳥の声と、少しやかましい蟬は、これも自然の一部だ。

さて、そろそろお暇を、とAさんに挨拶に行くのと、「待って、今ゼリーが出てきたよ」と言い、ものすごい大きなボウルにオレンジ、ナシ、ブドウ、パイナップルが一杯のゼリーを手渡された。まるでどんぶ

りのような深鉢に気持ちの良い冷たい感触のフルーツは、また不思議とお腹に入る。「え？これいったい何人分？」と大騒ぎをしながらも結構食べるのには、我ながら笑ってしまう。

今度こそお礼の挨拶に行きおすおすと「あのう、これいっただいて行ってもいいですか？花瓶に挿したいのです」と、五、六本の落ち穂を見せると、Aさんは「おお、もつとあげるよ、待ってなさい」と言っただきめの束と、わたしが持っていたのを取り替えてくださりながら、「これはね、花瓶に挿さずに、下に向けて壁に下げてください」と言われた。そこへ奥様も出て来て、カレーを持って行きなさいと、またこれも沢山袋に入れていただいた。

わたしたち三人が車へ戻るために歩いてみると、Aさんが後ろから車で通り、窓を開けて、「あのね、この辺りの畑から何でも取って行っていいですよ。きゃべつでもなすでも何でも」と言っ行って行かれた。わたしたちは車に戻り、紙袋を一つ持って来て、喜喜として、ピーマン、なすキュウリなど採り、さらにかぼちやを見つけて、「ほら、木村さん採ってごらん？」と言われ、ほどよいお美味しそうなかぼちやを蔓から折り採った。収穫のやり方として、このもぎかたでいいのか心配だったが、やはりうれしい。さらにわたしはその辺りの、名前が分からない小さな花を見つけては

触って楽しんでいた。そんなところへほどなく用事を済ませたAさんが戻って来て、また車を留めて、「そのお芋の茎を採って皮をむいて甘辛く炒めるとおいしいから採って行きなさい」と言う。仲間の二人は、どれがAさんが言うお芋なのか分からずにいると、車から降りて来て教えてくれた。

あまり欲張らずに帰ろうとしたところ、一人がモロヘイヤを見つけ、わたしと彼女は大喜びで柔らかいところをつまんで引き上げた。

帰路、ものすごい雷雨に遭い、ドライバーは大変だ。しかし、我が家へたどり着く頃にはすっかりその雨から抜け出し、降りる時には傘一本も要らなかつた。

年一度の稲刈りの企画を知っていたドライバーを務めてくれた友人が、まだ喪失から抜け出られずにいるわたしを、この台地の贈り物の行事に誘ってくれたのだ。頂いて来たお野菜とカレーは我が家で三人で分け（多分わたしが一番いただいているのだろう）、稲はわたしの大切な人の写真の向かい側に、素敵なインテリアとして飾ってくれた。

これは9月6日土曜日の、阿蘇^{あそ}敏文^{しんぶん}さんが無農薬、有機農業にこだわる、COSMO（こすも）農園でのことである。

2008年9月29日記

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

20年度 第5回 (第17回) 報告

1 日時 平成20年8月16日(土)

18時30分～20時42分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者 (省略)

4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回 (全十回)」点字編、墨字編

レーズライター・固、個、兄、見、介、先、祝、

兌、説、税、覚、視、界

5 学習会内容

(1) 前回の復習 テキスト第二回

3 複合文字 (1)

漢点字には制約があり、墨字の構成(形)とは異なる並びとなる場合がある。

・門構え(門)の文字

「聞(門と耳)」、「問(門と口)」、「開(門と廿)

「問(門と才)」、「問(門と日)

「問」には訪問の言葉があるが、人を訪ねて質問す

る、疑問を投げかけるという意味がある。

・口(くに)構え(口)の文字

「回(口と口)」、「国(口と玉)

「国」の旧字は國で、中の或には戈(ほこ)が含まれ外敵と戦うという意味がある。

(2) 今回の学習内容 テキスト、漢数字

及び第一基本文字を部首とした文字 (3)

・固(口構え2・3・5・6;古2・4・5

とそれを含む文字

44 「固」音読みのコは漢音、クは呉音。ク

つく熟語は広辞苑では掲載なし。訓読みの「かた、い」と同訓の文字に「硬い」「堅い」「難い」がある。他の訓読に「もと・より」もある。「古」は十

(盾)と口(サイ)で器の上に置くことで神を守る誓いとした意味でいわゆる古いではない。テキストの「

古く固い頭蓋骨を四角い枠の中に押し込めた形」は語釈。他の熟語に「固定」「地固め」「凝固」「断固」

などがある。

45 「個(人偏(1・3)と口構え(2・3・5

6)で表す。古の部分は省略。音読みのコは漢・呉音、コは慣用音(唐音)。クの読みは不明。元の意味は一人。熟語に「個展」「個別」「個室」「個条」がある。

*元(1と2・5)の儿(2・5)の付いた文字

46 「兄(口(1・2・4・5)と儿で表す。

口はサイでサイを膝まづいて捧げる形を象つたもの。
家の長男で家を継ぐ宿命を持つ(常用字解)。音読みの
ケイは漢音、キヨウは呉音。訓読みは「え」「あに」
「せ」。「賢兄」「大兄(おおえ、おせ)」「同母
兄、同母姉(いろえ)」「吾兄(あせ)」「他に「従兄
弟・従姉妹(いとこ)」「などがある。

47 「見^見」目^目(1・2・3・4・5・6)と儿^儿。で
表す。音読みのケンは漢音、ゲンは呉音。訓読みの
まみ、えるは人に会うこと。熟語には「発見」「所見」
「見当」「後見(こうけん、うしろみ)」「一見(い
ちげん、いつけん)」「拝見」「花見」「月見」「見
世物」「風見(かざみ)」「など多数ある。

48 「介^介」ひとやね^{ひとやね}(4・6)と儿^儿。で
表す。ひとやねは人ではなく、鎧を意味し、人が鎧を
つけた様子を表す。元々は隔てるという意味合いがあ
る。音読みのカイは漢音、ケは呉音。熟語には「介然^{介然}
(孤立しているさま、しばらくの間など)」「御節介^{御節介}
「厄介^{厄介}」「介抱^{介抱}」「介爾(非常に微弱なこと)」「な
ど。訓読みのすけは名前に用いる。

【字式】(常用字解)

「兄」口・儿 「磨」麻√石 「回」口√口
「安」宀/女 「林」木+木 「森」木/「木+木」
「聞」門√耳 「摩」麻√手 「回」口√口
「国」口√玉 「見」目・儿 「崎」山+奇

追悼、木下田鶴子様 ありがとうございます。

横浜漢点字羽化の会代表 岡田健嗣

去る九月七日、本会のボランティアの代表をお務め下さ
っている木下和久さんの奥様、木下田鶴子様が、ご逝去さ
れました。

田鶴子様と本会との関わりは、言うまでもなく木下さん
が活動にご参加下さったときから始まります。一九九六年
一月末日を最初とする、漢点字訳ボランティアの最初の講
習会に木下さんをご参加下さり、二日目だったかにご都合
でご出席できず、代わりに奥様にご出席下さいました。私
が初めてお目にかかったのはその折でした。

その後、木下さんのお宅を訪れた折りにお会いしたり、
お電話では話が弾んで、結構長話になったりもしました。
木下さんが本会の活動の大黒柱として、長年活動を支え
ていただけているのも、その後ろの奥様の存在が大きかったこ
とは、取り立てて申さずとも当然のことというのが、会員
の間で一致した思いでした。

田鶴子様は長年、横浜市の小学校で教鞭をお執りになつ
て、何校もの校長をお務めになりました。沢山の教え子
を、世に送り出されたものと存じます。

退職後は音訳ボランティアの活動にご参加になったり、
地域の福祉活動などにも積極的にご参加になりました。
しかし残念ながら私が初めてお目にかかったころには、
既に心臓にご病気を抱えておられて、ご無理の利かないお
身体であることが、声音などから私どもにも薄々感じられ
るのでした。

そして二〇〇〇年には脳出血に、二〇〇三年には脳梗塞
に見舞われて、ご病氣との闘いに入られました。

ご生前の田鶴子様のご厚情に感謝し、お姿を偲びつつ、
ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

漢文のペリシ

長恨歌 (5)

盛唐 白居易

椒 梨 落 西 秋 春 對シテ 芙 太 歸リ
 房, 園, 葉 宮 雨 風 此ニ 蓉, 液, 來タレバ
 阿 弟 滿チテ 南 梧 桃 如 如ク 芙 池
 監 子 階ニ 苑 桐 李 何, 面, 蓉 苑
 青 白 紅 多ク 葉 花 不ニ 柳ハ 未 皆
 娥 髮 不レ 秋 落ッ 開ク 涙 如シ 央, 依ル
 老 新タニ 掃ハ 草 時ノ 夜 垂レ 眉, 柳 舊ニ
 イタリ

※遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』(旺文社)参照

歸り来たれば池苑皆旧に依る

太液の芙蓉未央の柳

芙蓉は面の如く柳は眉の如し

此に對して如何ぞ涙垂れざらん

春風桃李花開くの夜

秋雨梧桐葉落つるの時

西宮南苑秋草多く

落葉階に満ちて紅掃わず

梨園の弟子白髮新たに

椒房の阿監青娥老いたり

未央|| 宮殿の名

椒房|| 皇后の居室

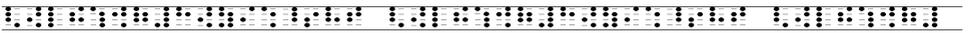
阿監|| 女官長

青娥|| 美しい容貌

太液池の芙蓉(蓮の花) →
を見て楊貴妃を思う玄宗。
(『長恨歌絵巻』)



安祿山の乱も鎮圧され、玄宗は長安の都へ帰る。池も庭も昔と変わらなが、楊貴妃は今はなく、宮廷の樂人や美しい女官長も年老いてしまった。



歸 リ 來 タレ バ 池 苑 皆 依 ル

舊 ニ

太 液 ノ 芙 蓉 未 央 ノ 柳

芙 蓉 ハ 如 ク 面 ノ 柳 ハ 如

シ 眉 ノ

對 シテ 此 ニ 如 何 ゾ 不 ラン

涙 垂 レ

春 風 桃 李 花 開 クノ 夜

秋 雨 梧 桐 葉 落 ツルノ 時

西 宮 南 苑 多 ク 秋 草

落 葉 満 チテ 階 ニ 紅 不 掃 ハ

梨 園 ノ 弟 子 白 髮 新 タニ

椒 房 ノ 阿 監 青 娥 老 イタリ



わびしい宮廷の庭。
階段に散り敷いた紅葉の
落ち葉は掃除されること
もない。

(『長恨歌絵巻』)



漢点字講習用テキスト

初級編 第十一回

3 複合文字 (1)

3. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

(「見」の上に八が付く「兌」が部首として含まれる文字、続き)。

(5 2) 税 ゼイ みつぎ
と - る め - く

「禾」の右側に「兌」を置いた形の文字です。「禾偏」は、作物の実りを表した部首です。ここでは、国家や支配者が、収穫物から決まった分量を抜き取ることを表しています。「みつぎ」には、この税の他に、「租・庸・調」のあったことが知られます。漢点字では、「禾偏」と「兌」で表されます。

「税金」「税額」「国税」「地方税」「直接税」「消費税」

※ 「見」を部首として含む文字二つ。

(5 3) 覚 カク さ - める さ - ます
おぼ - える さと - る

「学」の冠と同じ「ツメ冠」の下に、「見」を置いた形の文字です。この冠は、手でやり取りしながら子どもにもものを教えるという意味があります。この文字は、目が覚める、ものを記憶する、ものごとを感じ取る、聞き分けるという意味を表します。漢点字では、「ツメ冠」と「見」で表されます。

「覚醒」「覚悟」「感覚」「知覚」「覚え書き」「覚束無い」

(5 4) 視 シ み - る

「示偏」の右側に「見」を置いた形の文字です。「示」の祭壇の意味は強くありませんが、じっとみる、真っ直ぐにみるという意味があります。また、「… 視」として、ものの見方を表すときにも用いられます。漢点字では、「示偏」に「見」で表されます。

「視覚」「視力」「視線」「視点」「視野」「白眼視」「客観視」



※ 「介介」を部首として含む文字一つ。

(55) 界 カイ さかい

「介

「界限」「世界」「学界」「法曹界」

※ 「学 、覚

(56) 栄 エイ ヨウ は - える
さか - える さか - ん

「学 、覚

「栄養」「栄冠」「繁栄」「春栄」「栄耀栄華」「栄枯盛衰」「栄花物語」

(57) 劳 ロウ つか - らす つか - れる
いたわ - る ねぎら - う

「ツメ冠」の下に「力

「労働」「劳苦」「劳力」「劳作」「苦劳」「勤劳」「疲劳」「劳せずして…」「劳を厭わず」



※ 「加」とそれを含む文字。

(58) 加  カ ケ くわ - える
くわ - わる くわ - うるに

「力 」の右側に「口 」を置いた形の文字です。ものを“くわえる”、数を増す、影響を与えるの意味を表します。さらに、“くわうるに”と、副詞的にも用います。漢点字では、「 (力)」と「 (口)」で表されます。

「加減」「加盟」「加入」「加圧」「加害者」「参加」

(59) 賀  ガ カ よろこ - ぶ

「加 」の下に「貝 」を置いた形の文字です。「加 」は、肩にもものを担ぐことを、「貝 」は、高価な金品を表して、祝いの品を担いで持って行くことを意味します。漢点字では、「 (加)」と「 (貝)」で表されます。

「賀状」「賀詞交換」「年賀」「祝賀」「慶賀」「謹賀新年」

※ 「化」とそれを含む文字。

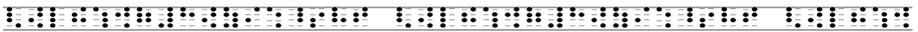
(60) 化  カ ケ ゲ ば - ける
ば - かす か - わる

この文字は、左右二つの部首からなっています。左側は「人 偏」、右側は「比 」の右側、すなわち、カタカナの“ヒ”に似た形をしています。何れも人の姿を表していると言われます。左側は、立っている人の、右側は、身体を曲げている人の姿と言われます。この文字は、このように人の姿形の変化を以て、ものごとの移り変わり、変容を表します。漢点字では、「 (人偏)」と「 (比の右側)」で表されます。この場合の人偏は、「」ではなく、「」です。このような符号を、「第二人偏」と呼びます。

「化学」「化合」「化石」「化粧」「文化」「変化」「進化」「羽化」「七変化」

(61) 花  カ ケ ゲ はな

「草 」の下に「化 」を置いた形の文字です。「化 」は、様々に姿を変えることを意味していますが、この文字は、植物が大きく姿を変えたもの、様子が変わり易いもの、すなわち鮮やかな“はな”を



表します。また波及して、華やかなもの、派手なものも指します。日本では「はな」と言えば、「サクラ」を指しますが、中国では「ボタン」であったり「モモ」であったりします。漢点字では、「𠄎 (草冠)」に「𠄎 (化)」で表されます。

「花壇」「花瓶」「生花」「供花」「花火」「花束」「花道」「草花」

(62) 貨𠄎𠄎 カ まいない - する

「化𠄎𠄎」の下に「貝𠄎」を置いた形の文字です。元もとは、何にも変えることのできるもの、すなわち「おかね」のことでした。現在ではそれに加えて、商品や財産も表します。また、「まいないする」と読んで、「賄賂」の意味にも用いられます。漢点字では、「𠄎 (貝)」と「𠄎 (化)」で表されます。左右が逆になった文字です。

「貨幣」「貨物」「貨車」「通貨」「財貨」

※ 「言𠄎」、「云𠄎𠄎」を部首として含む文字。

・「言𠄎」を含む文字。

(63) 信𠄎𠄎 シン まこと のぶ

「人𠄎𠄎」の右に「言𠄎」を置いた形の文字です。一度口に出したこと、決めたことを、曲げずに実行する、本当のこととするという意味を表します。また、本当のことを伝える、ものごとを信じるという意味もあります。漢点字では、「𠄎 (人偏)」と「𠄎 (言)」で表されます。

「信用」「信頼」「信仰」「信号」「通信」「音信」「風信」「交信」「電信」

(64) 恋𠄎𠄎 レン こい こ - う

こい - しい

この文字の旧字体の上部は、横に「糸𠄎、言𠄎、糸𠄎」と並んでいます。糸がもつれるように、きっぱりとものごとを決めかねる、ものごとが乱れる様子を表しています。この文字は、その下に「心𠄎」を置いた形で、心がもつれ乱れることを表しています。男女の心の引き合う力、それによって引き起こされる様々な人間模様を含んだ文字です。漢点字では、「𠄎 (言)」と「𠄎 (心)」で表されます。二つの「糸𠄎」が省略されています。

「恋愛」「恋情」「恋慕」「失恋」「恋心」「忍ぶ恋」

「報告とご案内」

一 木下田鶴子様、ご逝去

本会ボランティア代表の木下和久さんの奥様・田鶴子様が、去る九月七日（土）にお亡くなりになりました。通夜を九日、葬儀並びに告別式を十日に、横浜市泉区のエヴァホール戸塚にて営まれました。

田鶴子様は、長い病魔との闘いに終止符を打たれましたが、本会の活動も、奥様のお支えがあつてのことと感謝せずにはおられません。

木下さんのご意思で、広くお知らせ致しませんでした。本誌で初めてお知りになりました皆様には、深くお詫び申し上げます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

二 本誌のDAISY化について

本誌「うか」は、墨字版の完成後直ちに、音訳者の皆様のお力で、テープ版を作成し発行しております。

昨今の音訳の媒体メディアが、アナログのカセット・テープから、デジタルのCDROMへと移り変わっております。この方式は「DAISY」と呼ばれま

す。本誌もこのDAISY版への移行を検討しております。計画では、七三号（二〇〇九年五月）発行分からの移行を考えております。

テープ版の読者の皆様におかれましては、まだDAISYをお聴きになれない方もおありかと存じます。そのような皆様には、暫時カセット・テープでお送りしたいと考えております。

七三号以降もテープ版をご希望の方は、七二号のご返送までに、その旨お知らせ下さい。

三 「生麦事件」

去る八月末に、吉村昭著「生麦事件 上巻」（新潮文庫）を完成しました。ご希望の方には既にお送り致しましたが、常時ご要望を承っております。EIB版、あるいは従来の漢点字書の形でご提供できます。

一〇月末には、下巻の完成も予定しております。ご要望をお待ち申し上げます。

四 字式のご紹介

『常用字解』（白川静編、平凡社）の漢点字版の完成を目前にしております。

漢字の三要素を「形・音・義」と言いますが、漢字



字式の例

林	=	木+木	周	=	冂>吉
森	=	木/林	麻	=	宀>林
休	=	人偏+木	摩	=	麻>手
保	=	人偏+呆	磨	=	麻>石
呆	=	口・木	魔	=	麻>鬼
国	=	口>玉	付	=	人偏+寸
聞	=	門>耳	府	=	宀>付
街	=	行>圭	腐	=	府>肉

では、文字の形がその意味や読みに直結します。漢点字の創案者である故・川上泰一先生は、その形の説明に苦慮されました。そこで「字式」という方法をご提案にられました。本会では『常用字解』の漢点字訳に際して、この「字式」を採用して、視覚障害者に漢字の形と配置を理解し易いよう、工夫しました。川上先生のご提案では漢字の構成要素の配置を、左右の関係を「+」で、上下の関係を「/」で表されましたが、これだけでは不十分と考えて、本会では構えと垂

れの中に入る形を「>」で、縦の関係で、互いにくつつくものを「・」で表すことに致しました。
（以上は、飽くまで漢字の形を表そうという試みで、字源から離れることもしばしばです。）

五 ニーズを募集しております。

・本会では、プライベート・サービスとして、漢点字訳書を製作しております。プリンターで打ち出したものばかりでなく、EIBファイルでもご提供しております。

内容は問いません。ご希望の方は、ご遠慮なくご相談下さい。

・これまで製作して来た漢点字書（プライベート・サービスの一部を含む）のご提供も可能です。随時本誌にご報告しておりますので、バックナンバーなどでご確認いただけます。
また近く、製作書のリストを作成する予定です。

ご利用下さい。



古い街の古いホテル

編集後記

▼先日の亡妻の葬儀には遠方からも岡田代表をはじめ沢山の方にご会葬いただき、本当にありがとうございます。岡田さんの心のこもった追悼文にも感謝の念に堪えません。今まさに高齢社会のまっただ中で、老々介護の問題をこの身を以て体験したことになります。介護保険や後期高齢者医療保険のことなど、いろいろの問題点が指摘されていますが、どういう形にせよ高齢者の介護や医療には大きな費用がかかるのです。高齢者自身がある程度の負担を強いられることはやむを得ないことでしょう。少なくとも、私の場合は介護保険と、それに伴う公的な介護制度の恩恵を十分に受けることができました▼身の回りにも、がんなどで急に健康を害する例があちこちに見られます。せいぜい自分自身の健康には注意して活動が続けていきたいものと思います。

(木下 和久)

訂正とお詫び

前号（「うか」第69号）15ページの表題の番号に誤りがありました。

「見果てぬ夢を（十一）」とありましたが、正しくは（十二）でした。訂正してお詫びします。

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー： 資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要： 上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は12月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。